

変化にも

透明性と安心感を

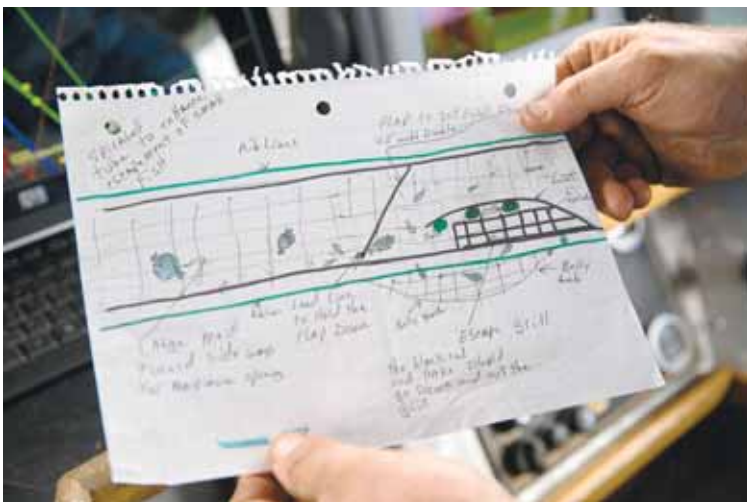
国外の経験に学ぶ



3

日本政府は主力魚種にしても、その種を混獲し漁獲枠を定め、獲る量を「てしまうこと」はある。か
制限していく方針。そこ「事にならない」と困って
「混獲」。ある魚種の漁を避けつつ、獲りたい魚
漁業者からすれば「どう 大切になる。」

エンバイロメンタル・
デイフェンス・ファン
(EDF) 提供で行った



混獲を避けるための漁具の設計(EDF提供)

魚種選び獲る工夫

米・西海岸 漁業者の協力組織も

国内の若手・中堅漁業者
へのインタビューでは、
混獲への不安の声が相



混獲魚の再放流は国内でも行われている
(早田大敷提供)

次いだ。複数の漁業者が
近年のクロマグロ管理
を例に「日本が国際機関
から与えられた漁獲枠
を超過しかけた際、国が
混獲で死んだマグロ
まで放流(投棄)を求め
られた」旨を証言し、投
棄による資源の「無駄死
に」を批判。混獲の対処
方法について「漁法別の
具体的な検討や説明が不
足している」との指摘も
出た。

の底魚管理でも、当初は
混獲投棄に悩んだ。「1
990年代までには多
くの魚種の漁獲量管理に
入っていたが、当初は枠
が緩く、あまり制限にな
っていなかった。枠は2
000年代に引き締めら
れたが、混獲投棄の問題
が目立ち始めた」(ED
F)

国内の一部では、特定
魚種の混獲を避ける取り
組みが既に見られる。混
獲物を生きたまま放流す
る(例・静岡や京都、三
重県早田の定置網、福島
県・福井県の底引網など)
、小さな若魚を混獲
しないため網目を拡大す
る(例・北海道石狩湾の
ニシン刺網)、漁業者同
士が情報交換し小型魚の
多い漁場を避ける(例・
島根県浜田の底引網)な
どだ。こうしたノウハウ
の開発と共有が、より大
切になる。

(東京支社・太田毅人)